

## 第一章 理念・目的・教育目標

### (理念・目的・教育目標)

- ・短期大学の理念に基づく目的および学科・専攻科等の目的・教育目標の適切性
- ・短期大学の理念に基づく目的および学科・専攻科等の目的・教育目標の周知方法とその有効性

### 【現状の説明】

#### 1 理念・目的

大谷大学短期大学部は、親鸞の思想としての浄土真宗を根幹とする仏教系の大学であり、併設校である大谷大学と基本的な理念を共有している。したがって、まず大谷大学の理念・目的などから述べることにする。

##### 1.1 大谷大学の理念・目的

大谷大学は、親鸞の思想を根幹とする仏教系の大学である。大谷大学の歴史的起源は、序章でも述べたように、1665（寛文 5）年に、東本願寺が子弟教育のために東本願寺別邸の涉成園内に設置した学寮にある。学寮は僧侶教育をもっぱらとする教育機関であったが、明治期における学校制度の整備にともなって僧侶教育と一般教育を兼ねておこなう学校の設定が必要となったことを機として、1896（明治 29）年、学寮学舎内に学寮とは別の組織として大谷大学の前身である真宗大学が設置された。その後、学寮内での一設備という不分明さを払拭するために、1901（明治 34）年、政治文化の中心であった東京に真宗大学を移転し、機構を整備して、新たに真宗大学として開校した。

真宗大学の「開校の辞」において、東京大学で広く西洋哲学や宗教学を修めた後に真宗大学の初代学長となった清沢満之は、以下のように述べている。

本学は他の学校とは異なりまして宗教学校なること、殊に仏教の中に於いて浄土真宗の学場があります。即ち、我々が信奉する本願他力の宗義に基づきまして、我々に於いて最大事件なる自己の信念の確立の上に、其の信仰を他に伝へる、即ち、自信教人信の誠を尽すべき人物を養成するのが、本学の特質であります。……又其の科目に至りては、一派に於ける宗学と、及び他の諸宗の教義の学と、最も本学に直接の関係を有する所の須要なる世間の学科とを教授いたします。

真宗大学に先立って自ら「大学」であることを名乗った東京大学と京都大学は国立大学として国家の官僚養成をもっぱらとし、最初の私立大学であった慶應義塾大学は経済人養成を主たる目的としていた。それにたいし、真宗大学の「開校の辞」では、真宗大学が親鸞の浄土真宗の思想に基づいた「浄土真宗の学場」としての「宗教学校」であり、その教育目標が、仏教を中心とした諸学問を教授することを通じて「我々に於いて最大事件なる自己の信念の確立の上に、其の信仰を他に伝える、即ち、<sup>じしんきょうにんしん</sup>自信教人信の誠<sup>まこと</sup>を尽すべき人物を養成する」ことであることが述べられている。

「自己の信念の確立」とは人間としての自己を知ることである。「自信教人信」とは必ずしもなじみの深い言葉ではないが、第 15 代学長の山口益によれば、それは大乘仏教における自利利他の菩薩行に比せられるものである。「……仏教の正しい実践である菩薩行は、正行とも正修とも訳せられる行学一如の修習・pratiṭṭhi あるのみである。この語は菩薩の自利利他の正行として示される

こともある。これは、真宗でいう自信即教人信である」（『教学の実践体系としての大谷大学』、『文化と伝統』第1集、1955年、所収）。つまり「開校の辞」では、真宗大学の教育目標が、〈人間としての自己を反省的に問うことによって自己の信念を確立し、反省的精神に基づいた自己の信念をもって、同じく人間としての他者をも養成するような人格を陶冶すること〉、であることが明らかにされている。自らを「愚禿」と名乗り、人間の本来性を「凡夫」と見た親鸞の思想に立ち帰って再確認するなら、

自らの弱さを正視し、そして、その弱さを知るがゆえに自己完結して孤立するのではなく、むしろ同じく弱者としての他者をも助け、他者とともに力強く生きてゆくために行動する人間、いわば弱さを介した「健全な強さ」をもった、精神面において豊かな人間を育てる

ことが、真宗大学の教育目標であることが述べられている（高史明、寺川俊昭、藤島建樹による対談「宗門が社会に捧げた大学として——大谷大学の現状と将来」、『文化時報』1993年10月13日付所収、における第23代学長、寺川俊昭の発言を参照）。

1913（大正2）年、真宗大学は再び京都の地に戻り、真宗大谷大学として現在の京都市北区に大学を設置した。この前後、清沢の後を受け、1903（明治36）年から1923（大正12）年までの20年の長きにわたって大学の要職に就き、真宗大谷大学の基礎を確固たるものとしたのは、オックスフォード大学で近代的な仏教文献学の手法を学んだ学僧、第2代学長の南条文雄であった。近代アカデミズムの精神を備えた学者であり、宗教者でもあった南条は、「為法不為身」、つまり利己的利益のためにではなく法（宗教的真理）のために生きることを大学人に求め（『真宗大学 廃滅の顛末』を参照）、「宗教の信念を養成して、教員自ら実践躬行、俯仰天地に愧ぢざる至誠の心を以て、学生の標準となられたき」（『宗教と教育』、『宗教と教育に関する学説及実際』所収）ことを教育者に求めた。これらは、清沢が真宗大学の「開学の辞」において述べた教育目標と共鳴する言葉である。南条は、清沢の遺志をついで真宗大谷大学の教育と研究の礎を築いたのである。

清沢と南条の精神を敷衍したのは、佐々木月樵であった。西欧諸国の教育事情の視察を終えて第3代学長となった佐々木は、1925（大正14）年、入学宣誓式で告示した「大谷大学樹立の精神」において以下のように述べている（〔 〕内は引用者による挿入）。

本大学が専ら世間の官公私大学及び各宗大学等とも大にその趣を異にする点は、本大学は先ず以て仏教学を以て諸学の首位とし、また之を中心として教授し研究する所にある。従ふて、先づ本学の予科〔第1学年および第2学年〕には、各高等学校にも、また他の公私大学予科にも見ざる所の仏典基礎学が正しく加はつて居る。……

次に本学々部の仏教学に就ては、少なくとも三つの目標を挙ぐる事が出来る。第一は仏教を学界に解放した事である。第二は仏教を〔学校における〕教育からして国民に普及することである。然しこれらの二大目標は人その人を得るにあらざれば出来難いから、第三には、宗教的人格の陶冶に留意することである。

ここでは、真宗大谷大学が宗教大学である所以の仏教について、清沢の「開校の辞」の言葉が敷衍され、改めて以下のことが明らかにされている。つまり仏教学の「第三」の目標から、①仏教を通じて学生の宗教的人格を陶冶すること、「第一」「第二」の目標から、②仏教が特定の宗門に限定・閉鎖されたドグマ的なものではなく、普遍的な学として広く世間、つまり社会ないし世界に解放されるべきものであることであり、これらが真宗大谷大学の目標であることである。これを、真宗大

学が東京に開校され、清沢が「開校の辞」において真宗大学の意義を表すにいたった経緯と重ね合わせるなら、②は、真宗大学が東本願寺内の学寮から分かれたれ、その僧侶教育が一般教育との緊張の関係のなかに置かれた趣旨をそのまま反映し、①は、清沢が真宗大学の教育目標として「我々に於いて最大事件なる自己の信念の確立の上に、其の信仰を他に伝える、即ち、自信教人信の誠を尽くすべき人物を養成する」という言葉で表現したことに相当する。①と②はそれぞれ、南条の宗教者および学者（研究者）としての資質にも、つながるものである。

さて、①の〈仏教精神に基づく人格の陶冶〉は、今日にまでいたる大谷大学の《建学の理念の教育的側面》ないし教育目標であり、②の〈仏教の学界（世界）への解放〉は、同じく大谷大学の《建学の理念の研究・学問的側面》である。両者は分離することなく相俟って大谷大学の建学の理念であり、大谷大学が社会にたいしてはたすべき使命となっている。繰り返しをいとわず、以下に記しておこう。

仏教精神に基づく人格の陶冶（建学の理念の教育的側面）

仏教の学界（世界）への解放（建学の理念の研究・学問的側面）

1949（昭和 24）年、大谷大学は新制大谷大学として再発足した。真宗大学から真宗大谷大学、そして新制大谷大学へと続くこのような変遷のなかでも、大谷大学は一貫して以上のような清沢と南条、そして佐々木の精神を建学の理念として継承してきている。実に大谷大学とは、自己の信念の確立（自己を知ること）に取り組む場、あるいは自己の信念を確立した個人として人生を送るための基盤を培い、さらに社会のなかで他の人々にも伝えていく姿勢と力を養う場であり、世界に向けた仏教発信の場にほかならない。これが、かつて清沢が語った「浄土真宗の学場」の意味である。

現代はいわゆる科学技術全盛の時代である。広く自然科学の領域における日進月歩の技術革新が日々の人間生活にもたらす恩恵は多大であり、これを軽視することは決してできない。しかし同時に、人間存在そのものにかかわる問題を抜きにして、技術の革新だけで人間の未来が約束されるわけでもない。その意味で、現代はいわゆる混迷の時代でもある。仏教、とりわけ親鸞の思想としての浄土真宗を根幹とした「浄土真宗の学場」たる本学の存在意義は、そのような現代にこそある。以上のような考え方に則り、本学は学則における本学の設置目的を以下のように記している（「大谷大学学則」第 1 条）。

本学は教育基本法及び学校教育法の定めるところに従い、仏教の精神に則り、人格を育成するとともに、仏教並びに人文に関する学術を教授研究し、広く世界文化に貢献することを目的とする。

## 1.2 大谷大学短期大学部の理念・目的

大谷大学短期大学部は、旧制大谷大学に設置されていた専門部を基礎として、学制改革により旧制大谷大学が新制大谷大学となった翌年の 1950（昭和 25）年に仏教科をもって開設された。大谷大学の建学の理念と比較するなら、仏教を中心とする人文諸科学の研究にかかわる建学の理念の研究・学問的側面はもちろんとし、教育的側面、つまり仏教精神に基づく人格の陶冶をとりわけ重視するところに大学短期大学部の独自性がある。そして、深く専門の学芸を教授研究し、職業または実際生活に必要な能力を育成することを目的とする、という短期大学一般が担う使命と照らし合わせるなら、仏教精神に基づく人格陶冶と職業または実際生活に必要な能力の育成とのあいだに密接な関係があることが本学の特徴となっている。

また、本学は、同一学校法人の設置による大谷大学文学部および大谷大学大学院とキャンパスを共有していること、学科構成、教育職員（以下、特に必要ない限り、教育職員を「教員」と称する）の専門性を同じくするものが多いことなどから、日常の教育研究活動なども協同してこれにあたっていることを一特徴としている。

2年という短い期間にも充実した学生生活を送れるように配慮し、小クラス制のもとでそれぞれの学科の特色を活かし、仏教精神をふまえて専門的な知識や技能の習得に努め、豊かな感性をもった人間形成をおこなっている。本学は、学則における本学の設置目的を以下のように記している（「大谷大学短期大学部学則」第1条）。

本学は教育基本法及び学校教育法による短期大学として、仏教の精神に基づき、職業に必要な専門教育を施し、教養ある有能な社会人を育成することを目的とする。

沿革を述べるなら、1950（昭和25）年の開設の際にまず仏教科が開設されている。次いで1963（昭和38）年には国文科、1966（昭和41）年には幼児教育科が開設された。1992（平成4）年には、それまでの国文科をより広い観点からの考察を可能にするために文化学科へと改組した。2000（平成12）年には、卒業後の進路を見据えて資格取得に対応できるようカリキュラムを一部見直し、語学・文化・情報の3履修コースとして再編をおこなった。また、2006（平成18）年には、幼児教育の幅広い要求にこたえるために幼児教育科を幼児教育保育科へと名称を変更した。こうして現在、本学には、仏教科、文化学科、幼児教育保育科の計3学科が置かれている。

## 2 大谷大学短期大学部を構成する3学科の教育目標

短期大学部を構成する3学科は、それぞれ独自の観点から人間や社会を見つめうる人間の養成を教育目標とし、そうした教育活動を通じて建学の理念を具体化しようとしている

### 2.1 仏教科

人間の本来のあり方を問い続けた積尊と親鸞の思想を学ぶことをとおして、自分自身への理解を深め、また他者とのかかわりを尊重できる自立した人間の形成を目標としている。小クラス制を採用し、教員や学生同士とのディスカッションを積極的にこなうことで、仏教を単に知識として学ぶのではなく、主体的に学修し、仏教の知見に基づき自らの生き方を問う力を養っていく。

### 2.2 文化学科（文化コース、情報コース）

日本・中国・欧米の歴史・文化・文学の研究をおこないつつ表現能力を養成する「文化コース」、そうした目的のために情報技術を積極的に活用する「情報コース」の2コースを設置している。両コースはともに、異文化に触れた際の新鮮な驚きを重視しつつ、基本的な「読む」「考える」「書く」「話す」能力を練磨し、確かな価値観をもつ自己を発信する力を備えた人間を育成することをめざしている。

### 2.3 幼児教育保育科

仏教の精神に基づいた保育観を確立した、人間性豊かな幼児教育者・保育者を養成する。具体的には、主体的な学修のなかから人間のあるべき姿を探究しつつ、教員と学生、学生同士という人と人とのかかわりのなかで自己形成を図り、やがて次時代を担っていく子どもたちとともに育ち、ともに生きようとする幼児教育者・保育者の育成をめざしている。

### 3 人間学を旗印として

全学を通じて仏教精神に基づいた統一のとれた教育をおこなうことは、学部や学科やコースといった組織を整備するだけでは十分ではない。そうした組織でおこなわれる教育内容にも統一性があり、通底する部分がなければならない。

さまざまな角度から人間および人間によって構成された社会を探究しようとする本学の姿勢は、本学が、自己がそれであるところの「人間」を探究する「人間学」の総合大学であることを意味している。これを受け、本学では、建学の理念を反映する教育プログラムとして、釈尊（ブツダ）の生涯と私たちの人生「〈仏教と人間〉について」を授業テーマとする「仏教と人間Ⅰ」と名づけられた科目を全学科の必修科目としている。これは、佐々木月樵が「大谷大学樹立の精神」において述べた「仏典基礎学」の伝統を引き継ぐものである。授業は少人数のクラス単位でおこなわれ、「仏教と人間Ⅰ」担当教員が第1学年の指導教員となる。この同じクラスが同じ指導教員の指導のもと、第1学年前期に学外クラス別懇談会をおこなう。また、本学のめざす仏教精神に基づいた教育をおこなうために、それぞれの学科の専門分野においても仏教に関する科目が配されている。たとえば、仏教科には「真宗学Ⅰ」、文化学科には「人間と文化」、幼児教育保育科には「仏教保育演習Ⅰ・Ⅱ」が必修科目として開講されている。

仏教科では、多彩な経歴をもった「真宗大谷派教師資格取得コース」（本学が科目等履修生向けに開設するコース）の学生と机を並べて学ぶことによって、それぞれの学生が相互に刺激し合う好環境を創出している。ただし、仏教科においても、寺院出身者の割合は年々少なくなっている。

文化学科は、本学文学部がもつ多様な教員・授業によって学生の知見を広めることに成功している。しかしそうした知見は現状では基礎的な教養にとどまり、実践的な能力の養成という意味からすれば、社会に出てからの職業や実際生活への直接的な結びつきが希薄になっている。

幼児教育保育科は、本学3学科のなかでもっとも職業と密接な関係をもつカリキュラムを備えた学科である。真宗大谷派をはじめとする少なからぬ仏教寺院は、戦前より幼稚園・保育園の運営というかたちで地域社会に貢献してきた。本学の幼児教育保育科（当初は、幼児教育科）はそれら多くの実践の場からの要請を受けて設置されたものであり、現在でも、仏教系幼稚園・保育園、および一般の公立私立の幼稚園・保育園で多くの卒業生たちが活躍している。このことは、本学の教育方針が広く受け入れられていることの現れと見ることができる。

### 4 仏教研究の拠点として

以上のように本学はとりわけ仏教精神による人格の陶冶と職業専門教育が密接に結びついている点に特徴があるとはいえ、建学の理念を具体化するためには、建学の理念の研究・学問的側面にかかわる課題として、仏教が学として、しかも他の人文諸科学と緊張関係にある学として研究され、その研究成果が広く世界に広められねばならない。

文学部、大学院文学研究科、短期大学部を同じ1つのキャンパスの敷地内に置く大谷大学は、文学部および短期大学部の各学科と大学院文学研究科の各専攻が仏教研究を核とした有機的関係を保ちつつ人間の総合的探究をおこなう「総合研究体制の内実化」という目標を掲げてきた。ここにいわれる「総合」という語について、第21代学長の廣瀬晃は、「真宗」という言葉と関連させつつ以下のように述べている（「真宗総合研究所開会式の挨拶」、「大谷大学広報」56・臨時号、1981年）。

真宗は、大谷大学の学事の全ての依って立つ根拠であります。と同時に、大谷大学の学事が、それを明らかにすることによって、真に創造的人間を誕生せしめる生命でもあります。……特殊化

し個別化して限りなく拡散していく学問研究の底に不知不識のうちに醸成されていく非人間化を問い直し、真に人間における学問であり、人間を成就する研究であるということを明らかにするための具体的な方法として、総合という言葉を使うということでもあります。

つまり、ここでいわれる「総合」とは、仏教、とりわけ親鸞の思想としての浄土「真宗」を核として人間の形成をおこなう有機的なシステムにたいする言葉なのである。1982（昭和 57）年の研究室棟としての博綜館竣工とともに導入された大谷大学文学部研究室の「4 群 6 層体制」は、こうした「総合研究体制の内実化」の第 1 段階であった。4 群 6 層の研究室体制とは、従来の分散的に置かれていた文学部 6 学科 8 研究室体制を学問的立場の親和性に基づいて 4 群（4 研究室）に統合再分類し、その一方で、全研究室に隣接する立体的な 6 層の書庫（図書館とは別のもの）を配置して研究室間の交流を促進することを目的とした、新しい研究室体制であった。また、1981（昭和 56）年の大谷大学真宗総合研究所の開設は、学際的な共同研究を推進して研究体制の総合化を促進するとともに、そのような研究を通じて若い研究者を育成しようとするものであった。

「総合研究体制の内実化」の第 2 段階は、2001（平成 13）年の「真宗総合学術センター響流館<sup>こいうりかん</sup>」の竣工である。1901（明治 34）年の真宗大学設立を大谷大学近代化の出発点とする大谷大学は、2001（平成 13）年の「近代化 100 周年」の記念事業として真宗総合学術センター響流館を建設した（以下、「響流館」と称する）。響流館でおこなわれる教育研究活動の詳細は他項に譲るとして、ここではその概略を説明するなら、響流館は整備された情報基盤を備えた地下 2 階・地上 4 階の建築物であり、そのうち、地下 1・2 階および地上 1・2 階は、博綜館にあった 6 層の書庫から運ばれた書物と図書館の書物を取りまとめ収蔵した図書館となっている。地上 1 階にある博物館では、本学が所蔵する世界的に貴重な文化遺産を展示し、一般に公開している。地上 3 階には、学生の主体的な意欲に基づく学修の場として、教員の研究室とは別に学生が共同で使用するための「総合研究室」を設置しており、本学の学生も使用できるようになっている。総合研究室は、かつて博綜館では 2 階から 5F を占めて垂直に分散していた 4 群の各研究室を 1 フロアに水平に取りまとめることによって研究分野間の有機的な交流を高めることをねらいとしている。総合研究室には、図書館とは別に辞書や参考書のほか基本文献などを整備し、各研究分野の任期制助教（2007 年度は 16 名）が配置されて、教育研究にあたっている。

同じく地上 3 階に置かれたメディアホールは、大谷大学真宗総合研究所（以下、「真宗総合研究所」と称する）での研究成果を含め、響流館全体でおさめられた研究結果を発信する場である。2006（平成 18）年には、総合研究室とメディアホールのあいだに「語学学習支援室 GLOBAL SQUARE」（以下、「GLOBAL SQUARE」と称する）が置かれた。地上 4 階は、長く学外に置かれていた大谷大学真宗総合研究所※を学内に移設して研究環境を整備した真宗総合研究所であり、諸外国との宗教問題を中心とする共同研究が推進され、本学の教員も研究に参画して、世界の仏教研究センターとしての機能をはたしている。真宗総合研究所でいわれる「真宗」と「総合」の意味は前述のとおりである。同じく、地上 4 階にある EBS（The Eastern Buddhist Society）は、世界的な仏教研究、とりわけ大乘仏教研究の雑誌 *The Eastern Buddhist* を刊行することによって、世界へ向けて仏教研究の成果を発信している。

※大谷大学の唯一の附置研究所である真宗総合研究所は、1981（昭和 56）年に開設されたが、1992（平成 4）年からは旧学寮の建築物を転用して学外に置かれていた。

以上のように、4 群 6 層体制の有機的統一性をなお飛躍的に高めた響流館は、「総合研究体制の内実

化」を具体化したものとして、現在、大谷大学、大谷大学大学院とともに本学の研究の中心となっており、仏教を中心とする人文諸科学の研究成果を社会に発信する場となっている。

### 5 建学の理念を広めるために

本学は、正課の教育カリキュラムあるいは研究といった側面からの建学の理念の具体化に努めるとともに、入学式や卒業式といった各種式典をはじめとして各種の宗教行事、さまざまな媒体や機会を通じて、建学の理念ないし教育目標についての学内外への周知徹底を図っている（以下の多くは、大谷大学、大谷大学大学院との共通の取り組みである）。

定期的実施されている宗教行事には、以下のようなものがある。まず入学した新入生は、真宗本願（東本願寺）参拝によって本学の基盤を理解する。毎年、6月1日は宗祖誕生会として、学生および教職員は、勤行と内外講師による講話を通じて仏教精神に触れる。開学記念日の10月13日には、開学記念式典、初代学長の清沢満之謝徳法要、名誉教授による記念講演をおこない、建学の理念の理解に努める。11月27日は大学報恩講として、宗祖親鸞の遺徳をしのぶ報恩講の開講の後、学内外の講師による記念講演をおこなって仏教精神を理解する助けとする。また毎朝、8時40分からは晨朝の勤行がおこなわれている。

紙媒体での建学の理念ないし教育目標の普及活動としては、学生全員に配布する学生手帳、「STUDENT GUIDEBOOK」をはじめとするさまざまな冊子に「開校の辞」と「大谷大学樹立の精神」の全文を掲載している。また、全文を掲載しないまでも、季刊の「大谷大学広報」や「大谷大学通信」は建学の理念を広報するという意図のもとに刊行されているものであり、学内のみならず父母、同窓会、後援会などにも配布されている。大学正門脇、北門脇にある伝道掲示板には建学の理念と共鳴する内容をもつ「きょうのことば」が月替わりで掲示され、また『きょうのことば』として刊行されている。一般雑誌の『AERA』（1995年4月号～2006年4月号）や『文藝春秋』（1986年7月号～）のコラムを本学の教員が交代で執筆していること、掲載されたコラムを『学苑余話』として数年一度刊行していることも、建学の理念の広報活動の一環であるといえる。

Web上での普及活動としては、Webサイト（大谷大学ホームページ <http://www.otani.ac.jp/>）に、「開校の辞」と「大谷大学樹立の精神」の全文を掲載し、広く普及活動をおこなっている。また、上述の「きょうのことば」や教員による一般雑誌コラムへの執筆についても同じWebサイト上に掲載している。

その他、学生募集活動においては、高校生にもわかりやすい建学の理念を表現する言葉として、「人間が大好きです」をキャッチフレーズとして、あらゆるメディアを駆使して広報活動をおこなっている。2004（平成16）年度から開催している、高校生を対象とした「全国高校生『人間が大好きです！』表現コンテスト」（KBS京都にて特別番組として放映）もまた、こうした建学の理念ないし教育目標の理念の普及活動の一環としての意味をもつ。

### 【点検・評価（長所と課題）】

建学の理念に基づく学科の教育目標については、開学以来、本学は仏教精神に基づいた人間教育を重視し※、仏教を中心とした人文研究の成果を国内外へ発信することをとおして仏教の世界への解放を積極的におこなってきた。この一貫性は評価されるべきである。

※このような教育目標からも、本学は一人ひとりの学生をかけがえのない「人間」としてのみ見ており、学生にたいして「人材」という表現は使用しない。

しかし、短期大学が担う「職業または実際生活に必要な能力の育成」に関しては、以下の課題ないし問題がある。まず、仏教科においては寺院出身者の割合は減少してきており、短期大学の使命である「職業または実際生活に必要な能力の育成」という観点が実際の仏教科のカリキュラムにおいてどのように活かされるかのかが明確ではなくなっている。文化学科は、文学部がもつ多様な教員・授業によってその知見を広めることに成功しているが、現状では、そうした知見は基礎的な教養にとどまっており、社会に出てからの職業や実際生活への直接的な結びつきが希薄となってきている。

理念および教育目標の周知方法とその有効性については、さまざまなメディアを使った積極的な広報活動がなされており、適切かつ有効であると評価できる。

### 【将来の改善・改革に向けた方策】

学科の理念と短期大学一般の使命との関係に関する課題については、学科再編・カリキュラム改編が必要であろう。仏教科については、カリキュラムの改編が必要である。文化学科については、2009年度に学生募集を停止し、在学生の卒業を待って廃止することが決定された。以上の詳細については、第二章の「研究教育組織」項を参照されたい。

理念および教育目標の周知方法については、今後もあらゆるメディアを使った積極的な広報活動を続けてゆく。2007（平成19）年には清沢の「開学の辞」の英訳が完成した（『真宗総合研究所研究紀要』第24号、2006年、83～95頁）。今後は、本学の建学の理念を、日本語のみならず英語によっても世界に伝えてゆく予定である。

### （目的・教育目標の検証）

・短期大学の目的および学科・専攻科等の目的・教育目標を検証する仕組みの状況

### 【現状の説明】

現在、本学には建学の理念ないし教育目標の検証および社会とのかかわりのなかでの見直しを直接的なねらいとした制度は現在のところ存在しないが、そのような意味をもったさまざまな行事をおこなっている。

各種の同窓会活動や在学生の父母などの保証人を会員とする教育後援会活動、たとえば、在学生の父母などが大学を訪問して意見交換をする父母兄弟懇談会、卒業生が大学を訪問するホームカミングデーなどは、在学生の保護者、社会で活躍する卒業生と大学が意見交換をする機会として重要なものである。本学執行部である学長ならびに部局長（学監・文学部長、学監・事務局長、大学院文学研究科長、短期大学部長、学生部長、真宗総合学術センター長、入学センター長）を中心とする教職員によって毎年全国各地でおこなわれる同窓会支部訪問も、同様の機会である。本学の教職員が学生の勧誘のためにおこなっている高校訪問もまた、高校関係者との意見交換の場として、本学の建学の理念ないし教育目標を検証する機会としての意味をもっている。その他、社会で活躍している本学出身の教育関係者との意見交換会（同窓高校教員懇談会）、企業関係者とのさまざまな協力関係は、実質的に本学の理念および教育目標の検証、見直し作業となっている。

### 【点検・評価（長所と課題）】

建学の理念や教育目標を検証する意味をもったさまざまな活動はおこなっているが、それらはひと

まとまりのシステムというかたちにはなっていない。これが課題となる。

**【将来の改善・改革に向けた方策】**

建学の理念ないし教育目標関係の設問を含んだ卒業生アンケートをできるだけ早期に実施すべく、2008年度からアンケート内容の検討に入る。アンケートデータの集計分析は自己点検・評価委員会のアンケート部会（自己点検・評価委員会の詳細は、第十四章の「自己点検・評価」項を参照）が主体となっておこない、その後の建学の理念ないし教育目標の普及活動に活かす予定である。